
小説版デッド・ゾーン

勝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小説版デッド・ゾーン

【Nコード】

N3405M

【作者名】

勝

【あらすじ】

あなたは戦争と単語にどんなものを連想させますか？この話は地味な爆弾処理班を描いた小説です。

アメリカ軍爆弾処理班屯所

俺は、この爆弾処理班のリチャード・リックだ。爆弾を処理する技術兵だ。2004年現在わずか150人という。

とても少ない一人だ。そして今日とある化学工場。一台の軍用車が来る。中からリチャードともう一人ピッド中尉が降りる。

「こちらです。ピッド中尉」そこにはTNTトリニトロトルエンがおいてあった。

「できるな。リチャード技術兵」

「はっ!!」といい最も簡単な処理方法凍結方法を行った。シューと音を出しながらどンドンTNTを凍結する。

「よし。帰投するぞ」

「はッ」と同時くらいにピッと不安な音。バツと外に出るピッド。そこには先ほどまではうごいてな

どいなかった時計が動いている。

「これがメインか、リチャード技術兵、先に行ってくれ」

まるで死にいくような声で言った。

「ダメです。」俺は無論反対をした。

「ダメだ。早く行け」

「私も・・・」

するとピッドは怒鳴った。

「これは命令だ。早く行け!」

「了解・・・」

それが最後だった。その後非難途中轟く大きな爆発音・・・

その後の調査でわかったことはまだ爆弾はあり、ピッドはひとつ解除したもののほかの爆弾が

爆発し死亡・・・

ここ近年テロが多発している。自爆テロ、今回のようなテロもある。事実爆弾処理班よりも

テロが多い。

数日後とある墓地・・・

そうピッドの葬式だ。彼は結婚しており子どももいる。彼はいつも口癖のように言っていた。

「早く任務を終わらせて妻と子の顔が見たい・・・。」と・・・しかし、その願いはわずか29歳という若さではかなく散った。

数日後

ピッドの跡継ぎにチャスト少佐が入隊する。話ではかなりのやりてだと言ったこと。

「よろしく。リチャード技術兵」

「お願いします。少佐」

一人の兵士がチャストに言った。

「さっそく任務です。バクダット郊外で謎の車両を発見とのこと。

現地の話によると中には爆弾

がつかまれているとの事です。」

「わかった。リチャード技術兵行くぞ」

「はっ！」

現地に到着するやいなやルールである防風服もきず、調査に行った。

「少佐、服」もちろん規則のため俺は忠告した。しかし、それも無視し、爆弾をカッターで切り、

見事解除した。しかし、このとき確信した。相当のやり手らしいが、かなりのクレイジーだと・・・

「少佐！これは規・・・」俺が注意しているのに

「わかった。わかった。」といい帰投した。

任務明けまで4日

今日の任務は爆弾をつけた少年が街にいること聞き、向かった。やっと防風服を着るようになった少佐・・・

しかし、今日は朝から大佐と口げんかしていたな・・・

「君がチャスト君か。君は今までいくつの爆弾を処理してきた？」

「947」

「950!」

「3個足りません・・・」と上司に対してこの態度。俺はまたかよ
と思いつながらその場を去った。

イラクの中心街

「自爆テロですかね？」俺はチャスト少佐に聞いた。

「恐らくな・・・だが、あんなガキが爆弾なんて・・・」といい慎重
に近づくと二人。

しかしその爆弾はあまりにもロツクが多かったためチェスト少佐は
「すげえ」と言った。しかしそれを否定する様に俺は

「ダメです。鍵が多過ぎます」少年は

「助けてくれ・・・まだ死にたくないんだ・・・」俺はすかさず

「はあ？お前が勝手に・・・」すると作業をしているチェスト少佐は
「やめる・・・人の命を助けるのが普通だろ・・・」間違いではな
い・・・俺が間違っていた。俺は作業に戻った。

しかし、イラクの救急センター

俺たちは任務を失敗に終わらせた。少年は即死・・・俺たちも重傷・
・

任務明けまで2日が延びて1ヶ月

一命を取り留め、仕事にも復帰した。そして、また爆弾処理の仕事
が入った。俺たちは現地に入った。

俺たちはいつもどおりに解除していた。すると後ろから銃声が聞こ
え俺の真横を通った。

「任せた」といい少佐はスナイパーライフルを取り出して敵を捜し
た。

「敵を確認。テロリストだな・・・12時の方向。狙撃する。」と
いい静かに引き金を引いた。

そして、ダンツと隣だ銃声があったが少佐は

「くそつ。外したか・・・」

すると今度はあちらから銃声があったがこれまた外れた。すると少佐
はまた引き金を引いた。そして、

「今度こそは・・・」いい静かにかつ慎重に撃った。
「よしっ！」といいスナイパーライフルをしまった。
「こちらも完了です」

任務明け

俺たちはとうとう故郷へ帰る事になった。

「お別れだな・・・」

「はい。」実にクレイジーな上司だったがこの人のおかげで死なずにいるのかもしれない。

去っていく少佐の後ろ姿に俺は静かに敬礼した。そして、俺はこの後ピッド中尉の墓へ行った。

そしてこう呟いた。

「あなたに劣らない人でした・・・」といいまた敬礼した。

平和の書

平和とは人間にとって自然な状態で

はない・・・

むしろ戦争の方が人間には自然状態

だと・・・

END

(後書き)

始め戦争ものがいいと決定しました。でもいざ書こうと思ってもアイデアがでない・・・

そんな折にテロの瞬間の映像を見て「これだ!」と思いました。地味なはずの爆弾処理班

というのは未知の世界でした。まだまだな作品ですが見て下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3405m/>

小説版デッド・ゾーン

2010年10月20日15時17分発行